

令和になり、通称・東京裁判で死刑宣告を受けた東条英機ら7名が絞首刑になった12月23日は天皇誕生日ではなくなった。その日に刑が執行された理由は、日本人それぞれがアメリカからのメッセージをどのように理解するかで決まるのだろうか。

東京裁判絡みでは、4月29日（昭和天皇誕生日）に起訴状交付、5月3日に開廷、12月23日（上皇陛下の誕生日）に死刑が執行された。11月3日（明治天皇誕生日）に公布された日本国憲法は、翌年5月3日に施行。真珠湾攻撃も現地時間12月7日ではなく、独立記念日の7月4日からワシントン誕生日の2月22日にやるくらいの知恵を出してはしなかった。なぜか大正天皇絡みがない。こじつけると大正天皇誕生日にマッカーサーが厚木飛行場に降りた、くらいだ。ドイツでもナチスの戦争犯罪を問うニュルンベルク裁判の判決があり、死刑執行があった。

いまナチスの犯罪と書いた。多くの映画、特にナチス将校を演じるトム・クルーズの『ワルキューレ』では、彼がクーデターの首謀者とされ、射殺される時に「こんなドイツ人がいたことを覚えていてくれ！」（原文は違う）と叫ぶ。つまりナチスは悪くて、ドイツ人は悪くないということなのか。

ちなみにアメリカ人の祖先で一番多いのはドイツ系らしい（イギリス系ではない）。では、ハリウッド映画で「こんな日本人がいたことを覚えていてくれ」という映画が世界に発信できるのか。できないかもしれない。しかし我われは知っている。それは未来を信じて戦った兵士であり、苦境を耐え抜いた市民であることを。

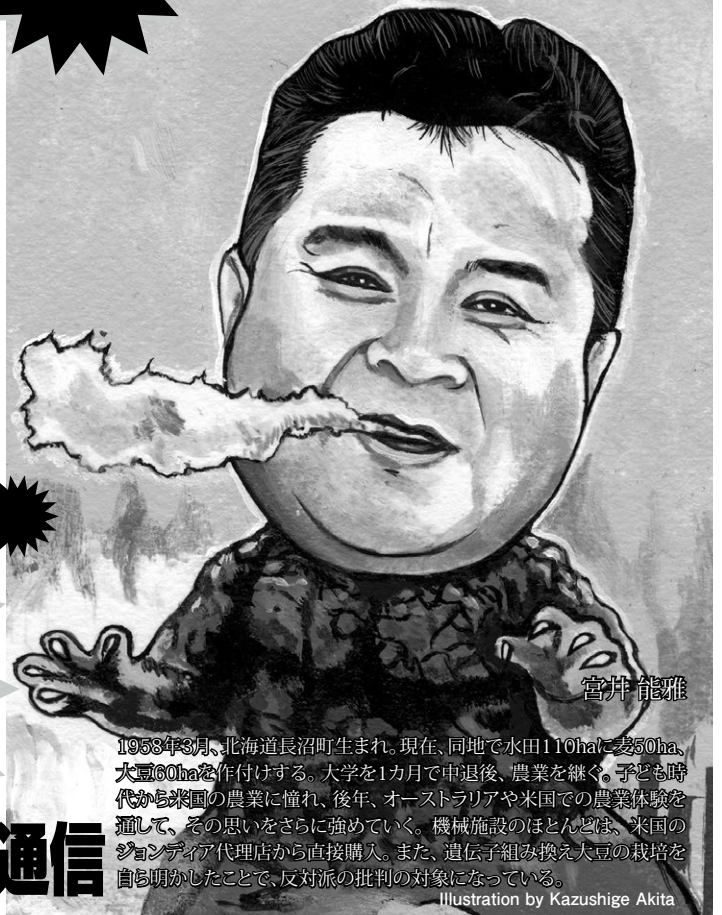
これらの日のことは以前よりは多くのことがネットで書かれています。では事実なのか、虚言なのか、そしてあなたの誕生日は単なる数字の組み合わせなのか、それぞれが調べてみるのも楽しいだろう。

事実は小説より奇なり

当時のことを書いてみよう。父は字が下手で、カンニングをするために炭で手の裏に書いたが当然、試験の時には消えて無くなったそうだ。そんな要領が悪い父は、どう考えても絵を描く素質など持っているはずもなかったが、小学校の校舎を描いたら一等賞を取った。1940年頃

戦後の豊かな日本は誰が作った？

Vol.139



宮井 能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作物にする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョシディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

様で同級生はどのように写真主義を忠実に見習ったが、父だけは晴天の空にして、存在しない日の丸の国旗を描いたのが一等賞の理由だったらしい。

では軍国少年だったのか? ある日、父は祖父に聞いたそう。

「日本は勝つのか?」祖父は何も言わなかったそう。で、父はこの戦争は負けるな、と感じたそう。

でも、備えは怠らなかつた。私が小学校に入る前の63年だと記憶するが、100坪の大屋敷の二階を上がった所の押し入れに、日本軍が使っていた通称38小銃を見つけた。母にこれは何なのか聞いたが、何も言わずに取り上げられてしまった。戦争が終わった45年には、父はまだ15歳の旧制中学4年生だった。同級生には海軍兵学校に進んだ者もいたそう。

10年ほど前のある夏、自宅で「November」と私が言ったら、当時80歳になる父が11月に何かあるのかと聞いてきた。驚いたのは子供たちや妻だった。「なんで英語を知ってるの?」と子供たちが聞いた。父の答えは「学校で習ったから」。私が「あれ? 英語禁止だったんじゃないの?」と聞き直したら、父は「いや、普通に習っていた」と答えた。英語を知らないとアメリカと

戦えないと先生が言っていたらしい。そこで子供が「12月は英語でなんて言う?」と聞いた。父はニタツと笑う「December」と答えた。その場にいた家族全員がオツたまげたのを想像してもらいたい。余談だが「じゃーバカはなんて言う?」と聞くと、父は私を見て、「お前だ」と言った(本当です)。

その当時、祖父が所有していた80町(80ha)には日本人の農場管理人がいた。彼からは40年、41年と不作で全く農産物が取れなかつた、との報告が上がっていた。まさか今になって強制的に働かされた!なんて微用工問題にはならないと思うが、42年の秋に18歳になる父の姉は農場近くの江別につながる南6号川の船着場で、朝鮮人らが麻袋を小船に積み込んでいる様子を見たそう。父の姉「その麻袋は何なの?」朝鮮人「中身は小豆だよ」父の姉「誰の小豆なの?」朝鮮人「この一帯の地主の宮井さんのだよ」

その夜、父の姉はこの見聞きしたことを祖父に伝えたそう。当然、驚きと怒り心頭に発したことだろう。農場管理人は当然クビになり、翌3年からは80haのうち20haを自ら管理することになった。父は週末、江別から自転車長沼の農場まで手

伝いに行かされたそう。その距離20kmを往復、舗装道路でも大変なのに当時は砂利道、自転車のタイヤがパンクした時は押して何時間もかけて往復したそう。

インチキ農場管理人のおかげ(?)で戦後の農地解放で60haは小作人に強制的に渡り、自ら耕作していた20haが残った。その小作人も80年までは全員が当地を去り、多くを買い戻した。

では、そのインチキ農場管理人は誰か? それは事情も知らない68年頃、インチキ農場管理人はみんなに愛嬌を振りまくが、なぜか私の顔を見るとあつち向いてホイ状態。父にこの不思議な対応を聞いてみると、カクカクシカジカとなった。当然そんなインチキ農場管理人のご子息たちなので、あそこ、あれで、あの幅で……と因果応報を地で行くことになる。でもガラガラポンは難しい、とだけ書いておく。

国民を豊かにする文化とは

終戦の45年は大冷害だった。農場でも販売用に回すコメもわずか、札幌からは闇米業者、着物を差し出す者も多くいたそう。餓死する者がいなかった(現実にはいたが)のは、金髪・ブルーアイのアメリカの食糧援助である。いまとなっては当時の

アメリカ余剰穀物の吐き捨て場だ、脱脂粉乳はマズイとか言われるが、食べ物のない恐ろしさを知らない人たちの後書きでしかない。

父はずーっと言っていた。「アメリカには感謝している」。いまの日本人で同じ言葉を発言できる者は何人いるのだろうか。戦後の豊かな日本を作ったのは本当に日本人なのだろうか。

あるテレビ番組で日本人1人当たりのGDPはアメリカの2/3程度しかなく、95年以降その差は年々広がっていると指摘していた。どうしてか。一つは効率を求めない社会だからだ。その実例が遺伝子組換え作物であることは間違いない。テレビ番組では、もし95年以降、アメリカ並みにGDPが伸びていたならば、1人当たりの年収はいまよりも150万円高い600万円になっていただろう、と発言していた。なぜ誰も怒らないのか。年収がいまよりも150万円高いことは何が悪いのだろうか。いまの状態(年収)はスペインやイタリアと同じだ。だから南の文化は国民を豊かにしないのだ。

というところで、組換えやゲノム編集を認めない生産者は、どうぞ南の文化のまま適当な正月を迎えてください。